慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 経済史研究序説の一章 |
| Sub Title | |
| Author | 高村, 象平 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1932 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.26, No.5 (1932. 5) ,p.817(121)- 846(150) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19320501-0121 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19320501-0121 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

めたのである。舊經濟學は經濟生活を經濟的動機より説明せんとした。新經濟學は經濟生活に及ぼす他方面の生活の影響を力説する事に依つて、社會生活中に於ける經濟生活の意義を輕からしめた。今やロージャーズはかゝる見地より出發して、却つて再び經濟生活の社會的意義を高唱するに至つたのである。

# 經濟史研究序説の一章

高村象平

## 一

「人類の經濟は、測るべからざる長い間に、みすぼらしい單純な起源から欲望充足の益々高度の形態へ進歩して來た。この長い發展過程に於いて、一經濟形態は絶えず内的必然性を以て他の經濟過程から生れ出たのであり、從てこの多様の遺物と萠芽とから一層の發達を遂げたのであるから、經濟發展は、從來の全過程に於いて、連結せる因果關係的の一の連續過程であり、又先行せる形成物と關聯して絶えず新しい形體が出現する一の生成である。」

これは嘗てベルリン大學教授たりしハインリッヒ・クノオが、その浩翰なる著述 Allgemeine Wirtschaftsgeschichte. 4 Bde. の冒頭にものせる言葉である。この書、殊に「自然民族及び半文化民族の經濟」と題せるその第一卷は、故福田德三博士によつて、「其は、經濟史に適當に屬するよりも、むしろ民俗誌に屬すべき自然民族、未開民族の經濟狀態の記述を以つて充されてゐるに止まる」（唯物史觀經濟史出立點の再吟味、前册、昭和三年、四五頁）と評されてゐるものではあるけれど、私は今茲で博士の批評に立ち入らうとはしない。即ちタスマニア人、オオストラリア人、ブッシュマン、ボオトクウデン、インディアン、イロケエゼン、メラネシア人、ポリネシア人、マオリ人、ミクロ

ネシア人、オヴァヘレロ、キルギス人等等に就いて、クノオの試みた記述説明の内容の紹介批判は茲に問題とするところではない。然らずして、上述の引用文並びにこの書に於いて看取られるところの、經濟史に對するクノオの見解に就いて、若干の私見を挾むこと、更には歴史に就いて私の採る見方を述べること、それが本稿の課題である。素よりこの私見と云ふも、それは既に先學の士によつて述べ説かれたものを以て充てること尠くないのは云ふまでもない。

上の引用文によつて、吾々に直ちに知られる第一の問題は、經濟發展の全體的觀察をクノオが取りあげたことであらう。「連結せる因果關係の一の連續過程であり、又先行せる形成物と關聯して絶えず新しい形體が出現する一の生成である」ところの經濟發展過程を、クノオの言葉通り全體的に觀察すること、それも單に皮相的に全體との關聯に於いて見るのではなく、内的必然性を以て全發展過程を裏書き付けること、この試みは從來に於いて決して缺けてゐた譯けではない。然し從來行はれたかゝる觀察の仕方は、少數を除く外、尚このクノオの云ふ以上に出づるものはなかつたと云つてよいであらう。多くの場合云はれた全體的考察に於いて、吾々はこの一の連續過程が直線的上向であることを見出すのが常であつた。それは字義通りの、内在的必然性に基く因果關係的連續過程として益々發達を遂げて來てゐると觀察するのである。そしてその中最も進歩せる段階が現在なのであると云ふのであつた。

ところでこの進歩の標準となるものは何であるか。その一端をとつて見るならば、或は永遠なる價値實現への人類の努力であると云ひ、或は聖なるもの、神の定めるところであると云ふ。神と神の意思とが社會の支配者であると云ふ。それは言葉を換えて云へば理念である。乍然これ等は歴史哲學の實質的問題として論ぜられたるところに屬する。從て今茲に謂ゆる經驗科學者としてのクノオの觀點と比較せん爲めに擧示することは非議せられるかも知れない。然し尚歴史現象に關する一般的法則を見出さんとする試みに於いて、形而上學に解釋せられたるものと、これから解放された歴史法則の探求との對比の意味に於いて、茲に掲ぐることを許されたく思ふ。敢えて一言する次第である。

かかる進歩的發展の思索に於いて中心たるものは唯一の眞理、しかも超時間的に妥當する眞理であり、言葉を換えて云へば超歴史的理性である。過去は現在によつて測られる。如何にしてか。それは究極目的への道程の一點として。この目的完成への過程が發展である。進歩的發展である。嘗て私が述べたヴィンデルバントの歴史觀、殊に彼の歴史發展の思想は、この雄たるものであることを失はないであらう。（本誌第二十六卷第一號所載拙稿參照）勿論個々の表現上の差異はあるけれど、謂ゆるカント的なる歴史觀に於いて、最も顯著な點は理性中心の靜觀的態度である。「歴史を内面的に解せんとして最高の統一から全體を見ることは、ヴィンデルバントによつて成し遂げられた」と私は書いた。歴史とは理性價値の實現過程である。從てこれを理解する爲めには、何を措いても先づ第一に最高の統一なる理性を、理性價値を理解せねばならない。そして普遍妥當性を有する理性價値によつて歴史は秩序立てられるこゞが必要である。云ふまでもなくこの進歩的發展に於ける理性價値とは、歴史の外にあるもの、歴史を超越せるものである。從て歴史の理解は、歴史を超越せ

るものによつて始めて可能となる。この歴史の外にあるものによつて歴史を理解すること、其處に吾々はカント的歴史觀の中心を見出すのである。

觀念論的歴史觀と型づけられるものの中には、尙自由意志の發展を說くヘエゲル的のそれが在り、或は又現象學的のそれ、或は歴史主義的のそれが存する。この最後のものは、この派の巨擘トレルチにより、いみじくも論結せられたるが如く、歴史は歴史によつて克服せられると見る。（Ernst Troeltsch, Gesammelte Schriften, Bd. III. Der Historismus und seine Probleme. 1922. S. 772.）それは要約すれば歴史を歴史の內にあるものによつて理解せんとするものであり、まさにかのカント的理解と對照の地位に置かるべきものである。これに於いては眞理を求めるに、歴史自體の中に探ねる。然しトレルチに就いて、又は彼に影響するところ甚だ多いと見られるディルタイに就いて述ぶべき場所を今は有せざるが故に、たゞこの見方に於いても全體性を見ることが重要となつてゐることを指摘するに止めよう。

とにかく、クノオに先行する、そしてクノオの見方と相反する觀念論的歴史觀に於いても、歴史發展の全體的觀察は行はれた。勿論既に一言せる如く、その本質に於いてクノオの歴史に對する立場と上記の諸哲學者の立場とは比較せらるべき、又混同せらるべきものではないであらう。然し發展を一の全體的な過程として理解する點に於いて、尙以上の如き見解が存したことを云はんとして、敢て同一の場所に私は採り上げた次第である。この點私は非難せらるることあるべきを豫期して釋明して置く。

さて、私は以下に於いて、歴史に就いて、更に歴史を推進せしむる原動力が何であるかに就いて、若干の紙面をふさぐであらう。そこに語らるべきものは素より何等新しくこれ等の問題に對して附加せらるべきところが無いものである。乍然この根本の問題に一應觸れて置くとき、私が本稿に於いて果すべきクノオの見解の批判は容易となり、又可能となるのである。

## 二

玆に云ふ歴史とは、云ふまでもなく人類の歴史である。それはまさしく人間によつて作られたものの。然しそれは人間の恣意によつて作られたものであらうか。これに就いては次のことが考へられねばならない。

人間は自然的條件の下に生活してゐると同時に社會的條件の下にも生活してゐるのである。即ち人間はこの兩條件の下に生れながらにして制約されてゐると云へる。あの有名な言葉、人間がZoon politikonであるとは、その本性を簡潔に述べ、然もこの人間が右の制約の下にある生物なることを說いたものに外ならない。人間に優る偉大なものはないと云ふ時、その人間とは個人を指すものでなく、社會の人間、社會化された人間を示すものであることは敢て贅言を要しないであらう。かくの如く人間の存在は、社會により自然により制約を受けてゐる。これを言葉を換えて云へば次の如くである。

人間はその周圍の自然的環境に順應するものである。然もこの環境は不變なものではない。之に對して、人間は一方その變化に順應すると共に、他方に於いては能動的に出てこの變化を自己に順

應させるのである。この自然への働きかけは人間特有の能力の行使、即ち人間のみがその生存維持の爲めの物質的生産に於いて道具を、勞働要具を作ることによつて可能となるのである。從て先づ勞働せねば人間は其の生を續けることが出來ないと云はねばならない。それ故にこの勞働は目的を有するものである。然もここに行はれる物質的生産は他の人間との關聯の中に於いてのみ行はれる。人間が社會的生物であると云ふのは、その生存の爲めの物質的生産を人間相互間に協力的關係を形作つて以て營むといふことである。この協同的勞働によつて人間は次第に自然への從屬から脱する。この自然的影響からの解放の半面に於いて、人間は益々社會的環境の影響の下に置かれるに至つた。こゝ人間がその生存に必要な生産の爲めに彼等相互の間に結ぶ關係――それは直接の生産過程に於ける關係のみならず生産物の分配關係も亦含むものである。何となれば後者は前者によつて決定せられるものであり、從て兩者は各々獨立したものではないから――の總體は、社會の經濟的構造を形作くると云ひ得よう。それは言葉を換えて云へば經濟關係である。而して既に見來りたるが如く、人間の第一の根本的欲求即ち生存維持は、かくて茲に社會の物質的基礎を構成するところの社會の經濟的構造を齎し、從てそれは社會の現實的基礎たるものであり、延いては他のあらゆる社會的なモメントを決定するものであるものと云はねばならないであらう。更にこの社會關係の下に物質的生産を行ふ間に人間の意識が生産されるといふこと、それは言語と同じく「他人と交通の必要、即ちその緊切を待つて初めて發生する」といふことからしても明かであらう。從て意識なるものも社會的な産物であると云はねばならない。然らば意識形態も亦社會に於ける現實的基礎に應ずるものであり、更には社會の經濟的構造によつて制約せらるるものであると云はざるを得ない。然もこの經濟的基礎は不變のものではないのである。

では經濟諸關係の或る一定の形態は何に依存するのであるか。素々人間の生存維持に資する物質的生産は、生産手段に人間の勞働力が加へられることなくしては不可能である。かくして死物たる前者は魂を與へられる。即ち生産力とはかかる物的と人的との二種の合成である。この生産力には自然的條件が影響するところ尠くないことは容易に看取られるであらう。謂ゆる地理的環境の如何は生産力の發達に大なる影響を與へる。然しこの點に就いては後述する豫定であるが、自然的環境の影響は過大視さるべきではないのである。何となれば勞働要具の完成は同時に自然的環境の征服を意味し、その他方に於いて人間は社會的環境へ、即ち彼等が人爲的に作つた社會的關係への依存の增大を意味するから。換言すれば社會の生産力が發展すればする程、人間の經濟諸關係は複雜となる。かくして物質的生産を行ふ人間相互の社會的諸關係の一定の形態は、この生産力の發展の程度に依存すると云はねばならない。然もこの兩者は相互に結合せるものであり、不可分的のものなのである。斯くて以上は次の如く要約することが出來よう。曰く、生産力の狀態により社會の經濟的構造の發展は規定されるが、他方に於いて經濟諸關係（或は生産關係。この總體が該社會の經濟的構造を構成する）はその社會發展の基礎たるものであると。「物質的生活の生産方法が社會的、政治的並びに精神的生活過程一般を條件づけるのである。」

今これをシュタウディンガア的表現を以てすれば次の如くである。

「人間の行動の性質、道德及び法律(等)が經濟的結合によつて制約せられるのは、恰も河床が河流によつて制約せられるが如きものである。而して河床とその一定の形狀とが、勿論地勢と地質とによつて制約されるやうに、根本的自然關係即ち生活必需品の獲得の方法(アート)は、經濟組織に影響を及ぼす。又同樣に一旦堀りうがたれた河床は爾後の水流を決定し、河床自身が受ける變化はその以前の狀態に關係する。これと同じく一度作り出された經濟的秩序も亦、既成の法律や道德の形態に於いてその後の經濟的秩序の發展を制約する。乍然能動的要素は、彼にあつては常に水であり、これにあつては常に生活必要品の獲得である。……生ける作因は經濟であつて、風習と法則との中に規定された變形ではない。法則は變形（Umform）であつて(眞の）形態(Form）ではない。形態は勢よく流れつゝある水の形態である。然し變形たる河岸は、その形態の中に自身を規定する河流自體よりも、遙かに廣く又高くあり得る。而して河岸が河流を尙平靜に且嚴然と支配してゐるやうに見える間に、既に河流は河岸を崩壞し堀りぐらつかせてゐるのである。經濟と法律との關係も亦同樣である。前者はその形態を有するが、後者は上部構造即ちその變形である。」(Franz Staudinger, Wirtschaftliche Grundlagen der Moral. 1907. S. 6.)

社會の經濟的構造は、前述の如く社會の現實的基礎である。それは基礎であると同時にその上に立つ一切を制約する。人間の意識も行動も、彼が社會的人間である以上、かかる制約を受けざるを得ない。從て曩に云つた人間が歷史を作るのであるといふ命題は、かくの如き制約を受くる現實的の人間が作るのであるといふこと、與へられた經濟的基礎の上に於ける人間の意識、行動が作るのであると敷衍することが出來よう。乍然この命題の解明はこれに止まるべきではない。更に立ち入つて、社會の經濟的構造はその社會の物質的生產力によつて決定せらるるとなすのは、この生產力が唯一る歷史も亦社會の經濟的構造、從て究極に於いては社會の物質的生產力によつて制約され決定されるものであると云はねばならないのである。

尙當然のことでありながら、然も次の如く私は附け加へるところありたいと思ふ。それは以上の如く云ふものゝ、歷史が社會の物質的生產力によつて決定せらるるとなすのは、この生產力が唯一の決定的要素たるものではないといふこと是である。如何にも吾々が一瞥を與へたる如く、經濟的要素は歷史を作る人間(社會的のそれ)の意識と行動とを制約し、從て歷史に於ける最後の決定的要素はその社會の物質的生產力であると云ひ得る。然しそれはこの經濟的基礎の上に築かれた法律も政治も宗敎も學問も藝術も等等孰れも一方的な、即ち單に受動的な社會現象たるに過ぎないと云ふ意味ではないのである。これ等はその相互間に於いて影響し合ふ。それのみに止まらずこれ等は經濟的基礎に對しても影響を及ぼすのである。謂ゆる精神文化はその社會の經濟的構造に對して逆影響を及ぼすのである。吾々は玆に社會諸現象の矛盾的な相互依存の行はれることを見るのである。乍然歷史過程に於いて行はれるこの逆影響は、素より後者の發展方向と矛盾しない場合にのみ、効果あるものであることは注意せられねばならない。即ち若し「反對の場合には、逆影響は、經濟的發展過程の抑制、緩漫化として現はれることは出來るが、然し決してこの發展過程の方向の變更としては現はれ得ないのである。」精神文化がかくの如く能動的社會現象たり得るのは、かかる限界を有

するものではあるけれど、尙社會の諸現象は相互關聯に於いて發展するものであり、又一切の現象は或る現象に對しては原因であると同時に他の現象に對しては結果たるものであることからして、それは自己を生んだ原因に對しても影響を及ぼすものであることからして、無視さるべきものではないのである。

これ等諸影響の下に人間は存在する。然かも究極に於いてはその社會の物質的生產力によつて彼は制約され、彼はこの直接の影響及び他の間接的影響の下に歷史を作るのである。彼は恣意を以て歷史を作り得るのではない。彼を制約する一切の條件の下に於いてのみ之を爲し得るのであると云はねばならない。

## 三

私は再び本稿冒頭に揭げたクノオの引用文に立ち歸らう。

彼がこの著述で求めた第一の目的は經濟發展の全體的觀察であつた。原始的蒐集經濟から今日の進步せる資本主義に至る全經濟發展に就いて概觀を與へることであつた。これは歷史に對しての一つの態度である。廣汎な、然し誤またざる課題の提出である。然し實際現在行はれてゐる歷史學に於いては之と異なる取扱ひも亦存してゐる。それは個々の時代、又は個々の問題、又は一定の地理的境界にその範圍を限つての現象を研究の對象とするもの。吾々が日常見聞する歷史學の分野に於いてかゝる研究に接することの如何に多きことか。とは云へ、私はこの研究を非難する意志は毛頭ない。たゞ云はんと欲することは、この場合の主題も亦社會の、或は經濟の全發展過程中の一點を占むるものであることを忘れてはならぬといふことである。例へばかゝる特殊的經濟史は全經濟の體系的發展史の建築材料たるものであるといふことである。然し本稿に於ける問題はこの研究態度に關すのではなく、歷史學內に於ける他の分野、そしてそれは結局クノオの採用するところの、人間發展の歷史的全過程の考察に就いてゞある。(註)

(註)クノオはこの兩者を指して、一はHauptstrasseであり、他はNebenweg又はQuergasseであると形容してゐる。

茲に私はこの後者の態度の是認理由として、ポクロフスキイの言葉を揭げて以て、私自ら語ることを省略しようと思ふ。それは又歷史研究の目的に就いて吾々に敎ふるところあるものと私は考へてゐる。つまり特殊史か一般史かの問題は結局、歷史研究の究極目的の問題に落着するからである。

「何故に吾々は過去を知ることが必要であるか。何故に吾々は十年、百年、千年、一萬年前に起つたことを穿鑿せねばならないのであるか」と自ら問を發して、ポクロフスキイは「過去を吾々が研究するのは、現在を理解せんが爲めである」と自ら答へてゐる。(M. Pokrowski, Geschichte Russlands von seiner Entstehung bis zur neuesten Zeit. übers. von A. Ramm. 1929. S. 1.)

彼は云ふ、「地上に於いてはすべてのものが發展する、即ちすべてのものが變化する。」「今や何人も書物から（ひとは博物館に於いてそれを見ることが出來る）、原始時代の動物及び植物の世界が吾々のと違つてゐたこと、世界が絕えず變化を續けて來たこと、それは又今も尙變化しつゝあり、又つねに變化するであらうといふことを知つてゐる。これは自然の法則である。」(Ebenda, S. 1. u. 2.)

然も長い間といふもの、世界は變化せず又すべてのものは一時に創造されたといふ說が、學者、

非學者を問はず支持を受けてゐたのは、決して彼等の無知の爲めのみでなく、意味のないことではないと云ふ彼は、その理由として「この說は甚だ多くの人々にとつて有利であるとする。それは「若しも世界ですべてのものが變化しないならば、然らば人間社會も亦變化しない」といふことを云はんが爲めであつたと說く。次いで云ふ、「若しも地球の發展、動植物界の發展の研究、地質學及び古生物學の研究が、世界の創造（一時に）及び不變性といふ伽噺を粉粹したとすれば、歷史及び考古學は他の一つの伽噺、即ち人間社會は恒に現在の如きものであつた、從て又常にかくの如きものであらうといふ伽噺を粉粹しつゝあるのである。人間は變化する、又他のすべてのものと同樣に變化するであらう。一社會秩序が崩壞する、之に對しその場所に他の秩序が發生する。これ等の變化の終局を吾々は考へ又は豫想し得ない。然し若し吾々がこれ等の變化を數十年、數百年に亘つて注意して觀察するならば、吾々は變化の合則性を知り、これ等の變化の起る法則を認め得るであらう。そして縱令吾々が例へば數千年後に社會がどうなるかを豫想し得ないとしても、吾々は如何に又如何なる仕方で人間社會がこれ等の數千年間に變化するであらうかを認識することが出來る譯けである。」斯くて曩の問に對して彼は再び答へる、「知ることは認識することを意味し、認識することは爲し能ふこと又は支配することを意味する。過去の知識は吾々にかくの如くして、未來に對する權力を與へる。この故に過去を知らねばならないのである」と。(Ebenda. S. 2. u. 3.)

この見解を承認するとき、歷史の全過程を全體的發展として理解することの正當さは明かに認めたことになるであらう。この點私はクノオの立場に贊意を表する。ところで問題は單にそれだけに止まるのではないのである。それは右に揭げたポクロフスキイの言葉からして明かに看取られるところのものである。

それは、長期に亘つての觀察からして變化の合則性を理解すること、それは歷史過程の全系列の考察によつての一般的特徵を注意することであり、從て斯くして一定の發展段階に於ける一定の型を認めることが出來るといふことである。云ふ迄もなく人間社會には多樣な諸現象が不斷に發生し又發生してゐた。從てそれから一般的特徵をとり出すといふこと、それは本質的なるものゝ把捉を意味するのであるが、このことは容易なものではなく、又可能なものではないと做されることが往々である。確かに「社會はその個々の諸要素の無限の相互作用として、これ等の要素やその諸關係の聯關の無限の體制として、吾々の前に現はれる。」これに對して、外的な因果的關聯は見出すことが出來るであらう。又社會生活の過程を決定するモメントは經濟的、政治的、人種的、心理的等々のそれであつて、これ等の相互に作用する諸要素の機械的平等は承認することが出來よう。然しそれ以上に進んで、かかる多くのモメントの中から一が主であり他が從であることを摘出することは不可能であるとされることが屢であつたし、又現在に於いても屢云はれてゐる。

この問題は結局史觀の問題として考へられる。右の論者は社會現象の多樣的關聯を見てそれ等の中に最も本質的な關聯を取り出すことは爲し得ぬところであると云ふ。それは一面に於いて歎聲である、たしかに。然しその半面には彼等は又壯麗絢爛なる社會諸現象の錯雜性をそのまゝ把えることに於いて――ここに他の科學に比して歷史學の優越性を彼等は見出すのである――即ち多元的史

觀を採り用ゐることに於いて誇らしさを感ずるのである。歎きの半面に於ける喜び、この後者は壓倒的に彼等を支配する。複雜なものは優越せるものであると彼等は考へる。或は强ひて斯く看做す。かくしてこの野に歩を進めることの幸福さに浸たつて、互に相顧みて誇らしげに肩を聳かし合ふ。そして云ふ、一元的史觀とは何であるか。それは、それを採る者の偏狹さを告白するものに外ならないではないかと。

私は玆で本質と現象の問題を採りあげよう。そしてこの企ては稍、岐路に立ち入る恐れなしとしないが、この認識上の問題に對して答へることは、とりもなほさずそのまゝ右の多元的史觀論者に答ふることになるのである。玆に云ふ岐路に入る恐れとは何であるか。それは、上來私がクノオに就き見來つた全體的觀察とは、云ふ迄もなく歴史過程を、云はゞ縱の流れの一貫せる姿に於いて把へようといふ問題である。然るに、以下に見んとする本質と現象との認識上の問題は、現象を全體との相互滲透の點から認識することに關するものであり、從て同じく全體とは云ふものの、この後者のそれは、云はゞ横の擴がりに於ける全體を意味するからである。それはかのルカッチの云ふ「全體性（トオタリテエト）」である。（Georg Lukács, Geschichte und Klassenbewusstsein. 1923. S. 36.）諸現象の一全體への關係の考察である。

從て縱の問題と横の問題との相違がある譯けである。乍然前者の把捉にとつて後者の理解は缺くべからざるものであるが故に、私はこの混同を努めて避けつつ考察を進めて行くであらう。

## 四

社會生活の諸現象の多樣性、そしてこの諸現象間の相互作用は、何人と雖も否定し得ざるところであらう。然し問題はこの點に潛んでゐるのである。それはこの諸現象、その相互作用を單にその限りに於いて觀察するか、或はこの相互作用が一定の基礎の上に發生する相互作用として理解するかである。

吾々が現實の事實に對する場合――それは歴史研究に於いて幾多の現象を取扱ふ場合でも同樣である――それは多種多樣である。然しこの諸現象はそのまゝ直ちに本質的なものであると認めることが許さるべきであらうか。寧ろ現象は、逆に、即ち現象はその本質とは反對の姿を借りて以て吾吾の眼前に現はれるといふべきではないであらうか。これは決して單なる懷疑論ではないのである。吾々が何等かを認識するといふ、そのことは「現象の中に本質的な方面を見分け、現象から本質に移つて行き、本質の方面を通じて本質をその全體性に於いて、その根據に於いて發見し得ることにのみあるのではなく、本質の現象を假象から區別し得ることにある。」吾々が以て本質の現象であるとするもの、それは然らずして假象であることが殆ど大多數である。

例へば歴史過程中に於ける戰爭なるモメントを把えて、これがその戰後の社會的困窮の原因であるとする。このこと自身の説明は何等誤まれるものではない。確かに戰爭はその後の社會的困窮を惹き起すと云はねばならないであらう。然し戰爭なる原因を採り上げて、それをその後の社會に於ける現象全般の直接原因であると看做すこと、それは斯く論斷する者がその戰爭に本質の現象を見出したが故に外ならない。私は最近寓目し得た經濟史上の一文獻に就いて具體的例證を試みること

が出來る。それは、英國に於いて「十八世紀後期の經濟上の變化が、該期の社會的困窮を惹起し得たかに就いて正確に說明し難いことは、該災害の淵源を他に求めねばならぬことを暗示するものであるとして、これを十八世紀に於ける數々の戰爭、特に對佛戰爭に得る」ところのアアサア・レッドフォードの見解である。私はこれに就いて次の如く書いた。レッドフォードは「社會的困窮の間接的原因たる物價騰貴、產業雇傭の不規則は勿論戰爭の影響に歸するのであるが、何が故の戰爭であるかに就いての究明を欠くことは評者の甚だ遺憾とするところであると云はねばならない。著者（レッドフォードを指す）の叙述する大陸封鎖、海上封鎖、英米戰爭、それ等の各產業に及ぼせる影響、勞資對立の擴大、勞働立法とその施行とに對する政府の方針等は、これ等戰爭の眞因が明かにせられざる限り甚だ皮相的叙述であると云はざるを得ない。」（社會經濟史學、第二卷第三號所載拙稿參照）

私はレッドフォードの斯かる態度を以て、假象と本質との混同であると云ふ。彼のとりあげた戰爭は、極言すれば現象の表面に浮ぶ泡たるに過ぎない。それは本質の現象ではなく假象たるものである。と云つて、戰爭から眼をそむけよと云ふのではないのであるが。本質と假象とは區別さるべきものではあるけれど、後者は尙前者の一定の表現たるを失はないものである。その限りに於いて即ち、本質的矛盾を表現するものとして示さねばならない。そして始めて現象の分析に於いて本質は把え得ると云はねばならない。勿論私は歷史叙述から戰爭を除外せよといふのではないのである。戰爭が重要な歷史現象であることは云ふ迄もないことである。重要な現象であるからそれを直視せよといふのである。その解釋を忘れてはならぬといふのである。ところで、このことを吾々は遺憾ながらレッドフォードには期待し得なかつたのであつた。かゝる誤謬――それは明かに誤謬であると云ひ得る――に吾々は數多く遭遇してゐる。このことからしても私は、本質と現象の問題は深くそして多く關心を示さねばならぬものであると思ふ。

實に本質は、その直接の形態では現象の表面に現はれないのである。このことは既に一言した吾吾の認識、即ち外的諸關係の中からその內的根據を見出す場合に、障害となつて横はつてゐるのである。結局それは孤立狀態に於いて觀察された個々の事實として、現象を觀察することから生ずるものであると云へよう。と云つて私は現象を輕視せよといふのではない。單なる抽象の採るべからざることは周知のことである。又私は本質と現象とを切り離して觀察せよと云ふのではなく、斯く切り離された本質が單純な不變的なものであると云ふのでもない。それは嘗て經濟學に於いて論ぜられた經濟人に就いて想起すれば十分である。この場合行はれる成果は「現實の多樣性を無視して、あらゆる時代及びあらゆる國民に役立つやうな無內容な法則を提供するか、或は現象にしがみ付いてその本質を曝露せず、これ等の現象を過程全體の發展法則に祭り上げるか」であると云はねばならない。

現實に於いて本質と現象とは別に存在するものではない。と云つてこのことは現象の中に本質的なものを發見し、之から非本質的なものを區別することが不可能であるといふ理由にはならない。簡單に私は次の如く云はうと思ふ。即ち現象はそれによつて本質を表現するものであると。個々の現象、それは時として相矛盾し相互に排斥し合ふものであるが、その中に本質は現はれるのである。

然しそれは本質的矛盾あるからであり、又この本質と現象とが相互に滲透し合ふからである。この兩者は引き離し得るものではないのである。曩に本質は不動的なものではないと一言したが、本質は不變的ではなくして流動的、過渡的である。從て本質の發展は現象の中に現はれ、又本質は現象を通じて發展するのである。「一つの本質は諸現象に於ける本質の發展を通じて他の本質に推移する。」爰に於いて吾々は現象の中に本質の發展を看取らねばならない。このことは單獨的現象の中に求めても之を得ないことは云ふ迄もないであらう。

ところで吾々が多種多樣な現象に對する。この場合それ等諸現象は根本に於いて同一の本質を現はすものであることが看取られ得る。然もこの本質が種々に現はれるといふことは、「本質の發展程度、條件、場所、時間及び事情へのその依存を表現するものである。」このことは注意せられねばならない。「諸現象の相違は根本に於いて本質的矛盾、即ち全過程の根據の運動に於ける段階の相違に對應してゐるのである。」即ち現象は本質的矛盾の程度を指示するものとして現はれるのである。從て吾々は本質を求めるに際して、現象を否定しては之を爲し得ないと云はねばならない。現象の中に本質の發展を、本質的矛盾を看取らねばならないのである。

## 五

かゝる認識に到達せざる時、多種多樣な諸事實に面して、多元的史觀論者は當惑する、そのうち孰れが本質の現象であるかを區別するに苦んで。彼は努力する。然もそこに於いて得らるゝものは結局焦慮のみに過ぎない。斯くて彼は遂にこの仕事を放擲する。まさにそれは悲しき諦めである。

何故ならば、このことは認識の拒否を意味するから。これが悲しき諦めでなくして何であるか。

ところで彼は消極的にこの企てから逃避するとしても、尙諸事實は儼然として彼の前に置かれてある。この存在に對しては彼と雖も眼をつむる譯けには行かない。爰に於いて彼は曩の問題に對する消極的假面をかなぐり棄て、却つて威勢高になつて叫ぶ。先づ事實を、事實を見よと。然しそれは決してさう云ふ必要はないのである。事實は彼の前にあるのだから。斯く叫ぶのは結局曩の逃避の跡を覆ひかくさんとする、はかなき見得の發露に過ぎない。さて事實を前にして彼は如何するといふのか。云ふ、よろしい、事實は茲にある。この事實に對して吾々は不偏不黨の立場から冷靜に接さねばならないのであると。乍然この時、冷靜な判斷が本質と現象との問題に關係あることを彼は忘却してゐるのである。そしてこの宣言に基いて彼と彼に追隨する者とが示すところのものは、諸事實間の單なる外的關聯である。或は孰れの現象も種々の原因の下に現はれるのであつて、その中孰れも見たり難く弟たり難いといふことである。その孰れも重要であるといふことからして、原因の箇條書きといふことも行はれるし、事實の眞相を把へたと稱して然も眞相とは遙か懸隔した表面的のものが登場することにもなる。

問題を進める爲め、私は一應茲で多元的史觀論者に答へて置かう。私は決して經濟的狀態が、人間の歷史過程に於ける唯一の決定的要素であるといふのではない。この問題は既に屢論じ來られたところのものであるが故に、敢て茲に詳細にそれ等を顧みる要はないであらう。確かに或る時は政治的要素が、或る時は法律的又は宗教的、思想的等等の要素が、或はこれ等一切の要素の相互作用

が一定の事實の原因であるし又あり得る。決して經濟的要素のみが歴史過程に作用する要素として直接に現はれるものではない。たゞ、これ等の一切の要素の相互作用が單なる相互作用として見らるべきものでなく、一定の基礎の上に發生する相互作用として解すべきことを云ふのである。と云ふのは、人間が歴史を作るのであるといふことによつて明かになるであらう。既に述べたるが如く、人間はその制約せられてゐる環境の下に於いて歴史を作る。人間にとつて何が最も必要であるか。私は茲で再び前言を繰り返へすことをしないであらう。政治的關係といひ觀念的關係といひ、それ等は經濟關係に影響するところ甚だ多いことは疑ひない。然しそれ等は人間無くして存在し得るものであるか。究極に於いて人間の生存維持といふ根本事實を吾々は無視してはならない。してみれば社會生活の諸現象間の相互作用は、究極に於いて姿を現はす經濟的必然性を基礎とした相互作用と解さねばならない。

この人間に就いてのあまりにも明白な事實、それは明白過ぎたが爲めに――これは決して詭辯ではない、眞實なのである――却つて人々の氣付かぬところとなつたのである。吾々はこれに絡はるヴェルを取り除けねばならない。そして又斯くしてこそ、社會現象は一の關聯に於いて理解され得るのである。要約すれば、社會諸現象が、人間にとつて第一の根本的事實たる生存維持の爲めの物質的生産を究極の基礎として、全體的關聯をなすものであることが理解されるのである。

私は以上に於いて多元的史觀論者と雖も尚、或る程度の事實の選擇は行ふことを前提として論じた。然し本質と非本質との區別なくして、如何なる選擇が可能であるかと問はれるであらう。私はこれに就いて一言したい。ことは素より多元的史觀に關するのである。

本質と現象とを穿き違へた彼の歴史家は、その區別よりの逃避に際して次の如く宣言して自らその消極的態度を明かにするか、又は默々として多種多樣な事實の堆積に認識能力なく突進するか、孰れかである。私の茲に取り上ぐべき點はこの前者にある。彼は云ふ、史觀なくとも歴史敍述は可能であると。然し茲に重大なる誤謬は潜まれてゐることを明かにしたいと思ふ。

結論を云へば、彼等が史觀なくして云々と云ふのは、若し彼等が歴史家たることを斷念して考證家或は博識家或は記錄蒐集家として立つといふならば、比較的可能であると考へられる。ところで茲に注意せねばならないのは、私が考證家と云ひ博識家と云ひ記錄蒐集家と云ふのは、決してかのクロオチェの云ふそれ等ではないことである。言葉の上からのみ辿つて行けばクロオチェは、これ等の肩書を次の如き人々に賦與する。

「吾々の私的の事件に關聯した時日及びその他の出來事を手帳に採錄するとき（年代記錄）、又は自分の机の小抽出しの中にリボンや乾いた花を保存するとき（謂ゆる「文書」蒐集の一例としてこの優しい樣子を選ぶことを許して欲しい）吾々の誰もが何時でもすること、これ等のことが、その規模を大にして、いはゞ全人間社會の委托によつて、ある勞働者階級の手に行はれるのである。この勞働者は、證據及び敍述を集めるときは文獻學者そして特に博識家と呼ばれ、文書及び記念物の類を蒐めるときは彼等は記錄學者または考古學者と呼ばれる。」（Benedetto Croce, Teoria e Storia della Storiografia. 3. ed. 1927. p. 16. 羽仁五郎譯、大正十五年、二五－六頁）

然しクロオチェに於いて歴史とは精神のはたらき（atto spirituale）なのであつて、吾々が從來呼び慣して來た歴史は文献學的歴史に外ならぬと云ふのである。「何故ならば、或る外的なものとしての史料を以て歴史を書くとすれば、畢竟史料の書寫しをするより外に何があるか。その書寫しは或は約言又は換言によつて變化してゐる。そしてそれは或る時はよき趣味の問題であり、或る時は一の文學的修飾であらう。それは又引用を配列して掲げるであらうが、これは時には公平と正確との證據であらうし、時には記事及び引用文書の中に存立すると信じられた眞理の大地の上に立つて居ると見せかける欺瞞と錯誤とであらう。現代に於いてこの種の文献學的歴史が如何に數夥しく存在するか。……彼等は壯重な又科學的な姿を裝つた歴史である。がそこには悲しいことには、精神的結合が缺けてゐる。そしてそはその根柢に於いて、博識な又は最も博識な年代記錄より外のなにものでもない。」（ibid. p. 20. 邦譯二九頁）。

從て私が上記に於いて博識家といひ考證家といふのは、決してクロオチェ的用語法によるのでないことを明かにして置きたい。私は史料の寫錄とか記錄の編輯とか又は文書の蒐集とかに只管專念する人々に就いて云ふのである。ところで、「これ等の必要な從て有益にして重要な機能をみたす」人々は、その仕事を史觀なくして爲しとげ得ると考へられる。と云ふのは、私の云ふ意味に於けるこれ等の人々は、蒐集の爲めにのみ蒐集すると極端に云つてもさまで僞りではないから。

これに反して、人々によつて普通云ひ慣されてゐる歴史家――クロオチェに於ける文献學的歴史家――にあつては、諸事實の選擇といふことは如何なる程度にせよ必要であると云はねばならない。云ふ迄もなくこの選擇とは、單なる個別の摘出と並列とではない筈である。それは全體との關聯なくして成立し得るものでないことは明かであらう。してみればそれは、その根柢に恒に置かれる史觀と獨立に行ひ得るものではないであらう。即ち事實の選擇に就いては史觀が、或は言葉を換えて云へば解釋が現はれると云はねばならないのである。

一見したところでは、史觀無くしても歴史は書けるとは、事實行はれ得るが如きである。然しそれは史觀なるレッテルを貼付した確乎たるものを所有すること無くして、及びその所有を意識せずしてと云ふに過ぎないのである。かのボオリングブロオクによつて綺羅を飾つた無智と定義された博識の所有者――文献學的歴史家――と雖も、その自覺するとせざるとを問はず結局は何等選擇なくしては、綺羅を飾ることが出來ないであらう。して見れば歴史家と自稱する以上、事實の選擇、從つて史觀なしには、歴史敍述は爲し得ないところであると云はねばならない。

爰に於いて曩に吾々が見たところの、多元的史觀論者の悲壯なる突進、即ち不偏不黨的立場が、決してその振りかざす旗幟の文言の如くあり得ないといふことが明かになるであらう。彼等の云ふ不偏不黨こそ、言葉の上では人々を一應は肯かせしむる響を持つものであるかも知れないけれど、その内奥に於いてはその歴史家の主觀が、即ち彼等の主觀的な史觀によつて諸事實を選擇し以てその外的關聯をとり出すといふ意味であることが知られるであらう。それは主觀的な選擇、從てそこに見出されるものは歪曲せる歴史過程である。それのみがこの旗幟の下に於いては可能であると云はねばならない。言葉を換えて云へば不偏不黨とは却つて黨派的の意義である。但しこれを彼等が

自覺するや否やは措いて。

## 六

三度クノオに立ち戻つて問題を進めよう。曩に私は物質的生産力に就いて考察するところがあつたが、この發展即ち物質的生産力の發展を、クノオは經濟發展の契機として擧げてゐるのである。彼は云ふ、「一民族の經濟段階は、如何にして、又如何なる程度に彼等の生活維持を彼等の勞働行爲によつて得てゐるかによつて、換言すれば彼等の勞働手段の技術的形成と、この手段の勞働過程或は生産過程への適用、及び生産された物的財貨の性質と量と、によつてのみ判斷され得る。」「更に一民族の經濟は、その勞働行爲と共に、彼等の社會的環境特に社會的編制及び組織が觀察されなければ理解出來ないのである。」と。(Cunow, Allgemeine Wirtschaftsgeschichte. Bd. I. 1926. S. 19. u. 20.) これに就いては私はその然る所以を繰り返へすには及ばないであらう。元來彼は自ら云ふが如く、「一般的經濟發展の發端の知識を、現存する自然民族の經濟方法の研究によつて得」んとするのである。彼の見るところによれば「原始的經濟段階の研究」には、この外に途はないのである。從て右の如く經濟發展の程度を認める標準を規定した後に於いて、一定民族の經濟段階を決定する標準を定めることが必要となる。それをクノオは次の如く規定する。

「一民族の經濟が、相次いで生じ來る經濟形態の系列順序の中に於いて、如何なる地位を占めるかは、種々の經濟方法の包括的比較によつてのみ確定せられるが、その際には、如何なる程度まで各段階が、この段階に先行した他の段階の繼續として現はれるか、そして次には如何なる點まで段階そのものが、新しい經濟構成（組織）の元素と條件とを含むか、に就いて特に注意すべきである。勿論その場合かゝる組織を自ら作りあげた民族と、外部からの影響に負ふ民族とは區別せねばならない。」(Ebenda. S. 20.) これは私が本稿の冒頭に引用したところの、發展を內的必然性を以て考察することを、別の言葉を以て言ひ現はしたものに外ならない。ところで茲に私が取り上げんとする問題は存する。それは曩の引用を再錄すれば、「經濟發展は、從來の全經過に於いて、連結せる因果關係的の一の連續過程であり、又先行せる形成物と關聯して絶えず新しい形體が出現する一の生成である」といふことに就いてゞある。

即ち簡單に云へば認識上に於いて、因果關係を見出すといふこと、更には新しいものゝ發生に就いて述べたいと思ふ。然しこゝに取り上げる問題はその本來の姿に於いて、曩に一言した横の全體性の問題である。若しクノオの云ふ意味に於ける發展の問題を究明するに止まるならば、縱の流れに於ける發展を取扱ふべきであらう。然し私は論究の都合上この縱の問題を、經濟史上に於ける發展段階理論の研究に關聯せしめて行ひたい意圖を有してゐる。從て能ふべくんば此の稿に於いて、若し餘裕なくんば發展段階說を論ずる機會を與へられたる際に詳論したく思ふ。(註)

(註) この問題は既に私が本誌上に於いてドプシュの發展段階否定論を紹介した際に他日を期したものであるが（本誌第二十五卷第五號拙稿參照）、その範圍甚だ廣く、例へばプレエズラアの如きは三十三種類を擧げて居り、(Vgl. Hans Proesler, Die Epochen der deutschen Wirtschaftsentwicklung. 1927. S. 18-39.) 然かもこれは未だ代表的なるものの總てではないと思考せらるるが故に――然し同時にこのプレエズラアのそれは吾々にとつて必ずしも重要なもののみの列擧とは考へられないのであるが――或は本稿に於いては之に論じ行き得ないと思ひ、茲に言及して置く次第である。尙この段階說に就いては昨年本誌上に於いて先輩奧田忠雄氏によつて論ぜられるところがあつた。（第二十五卷第三號「理論經濟學の對象」九七――八頁）。

就きて見られたく思ふ。

從て私は再び横の全體性の問題に立ち入る。

多種多様な社會諸現象に於いて本質は埋もれてゐるのが普通であることは既に論じたところである。吾々は先づこの埋もれてゐるところのものを堀り起さねばならない。而して茲に求める根本的事實とは、人間が生存維持の爲めに物質的生産を行ふことであることも亦既に見來つたところである。さて吾々がこの吾々を取りまく諸現象をその發展に於いて認識するに當つて、これ等諸現象は各自決して自立してゐるものではないのであるから、先づ諸現象間の相互作用を發見せねばならない。最初かくして行はれるのは云ふ迄もなく外的相互作用を認めることであらう。然しそれだけでは勿論不十分である。吾々は云はゞかゝる直接的認識の内奥に進まなければならない。かくして次に發見されるのは因果關係である。諸現象間に於ける原因結果の關係である。然しそれは單に一現象が原因であつて、他の現象が結果であると觀察するだけに止まらず、前者も現實に於いては結果として現はれ、後者も亦原因となることが理解せられねばならない。このことは私は既に逆影響を考察した際に一言したところである。よく云はれるところであるが、例へば法律と經濟とに就いて見るならば、一定の法律が一定社會の經濟狀態の結果として制定せられる。即ちこの關係に於いては經濟は能動的原因である。然もその他方に於いて、この法律は該經濟狀態に對してその發展を規定する。茲に於いて、法律も亦經濟の發展の能動的原因であると云はねばならない。それは相互作用し、逆影響し、而して相互發展するのであることが知られねばならない。即ち兩者は協同作用して以て社會の發展を可能ならしめるのである。しかのみならず、この各はそれ自身に於いても亦夫々發展する。それは、この各の孰れも皆現象と本質との統一であり、各はその本質に從てそれ自身に於いて發展することからして、容易に看取り得ることである。

言葉を換えて云ふならば、諸現象を觀察するに單なる相互作用の把捉だけでなく、更にこの直接的觀察から突き進んで諸現象間の因果關係を探求せねばならぬと云ふ。かゝる現象間の内的關聯の認識は、その關聯のモメントを把捉して以て本質の究明に向ふが爲めに缺くべからざることである と云ふ。吾々は一切の現象は内的に矛盾したものであるといふことを知つてゐる。そしてこの内的矛盾があらゆる現象を發展させるといふことを知つてゐる。それは又曩に言つた本質的矛盾の謂ひである。既にこれ亦知る如く、本質と現象とは別の存在ではない。從て本質そのものは決して靜止的なものではない。それには發展のあらゆるモメントが含まれてゐる。それ自身に矛盾を包含してゐるのである。吾々が認識を進めて本質を究明するといふことは、本質的矛盾の發見のことでなければならない。然もこゝに注意を要することは、この本質的矛盾が發展の過程の原因であるのは、究極に於いてであることである。即ち現實に於いて發展はひとりこの本質的矛盾にのみ依存するのではない。發展の條件たる他の一聯の諸矛盾にも依存するのである。發展の源泉は本質的矛盾であるとは云へ、それは條件と結合して行はれるのであると云はねばならないのである。

## 七

諸現象の因果的相互依存性の發見により現象間の内的關聯は確立され、茲に發展の合則性は確立されるといふことは、吾々が多くの先覺により敎へらるゝところである。ところで發展を對立物の統一として見るとき、古きものゝ廢滅と新しきものゝ發生との理解は可能となり、延いては飛躍的

發展の理解も可能となるのであるが、この問題は玆に續いて論ずることを止め、曩に一言した發展段階の理論を取扱ふ際にまで讓り置きたいと思ふ。要するに以上叙述した認識に就いて約言するならば、外的關聯の認識から進んで內的關聯へ、そして本質的矛盾を取り出すことを云つたのであるが、更にこの內的關係の分析により具體的過程の合則性を發見することは之を他の機會に俟つことにしたのである。

ところで私は、尙もクノオの云ふところに從て、少間述ぶるところありたい。それは本稿第二節に於いて一言したことではあるが、社會と自然的環境との關係である。而してこれ亦既にクノオに就いて見たところであるが、彼は一民族の經濟段階を理解するに、該民族の勞働行爲と社會的環境との觀察を以てすべきを云ふ。彼自らの言葉を以てすれば、「一民族の經濟關係を知らんとすれば該民族の居住する地理的生活地域との關聯に於いて、又社會的編制に從屬せしめて以て研究せねばならぬ」(Ebenda. S. 22.)と云ひ、或は「經濟方法は本質的に、一民族の地理的生活地域が與へてゐる發展條件に依存し、又更にはこれ等特定生活地域に於いて歷史的に組織された社會的編制に依存する」(Eb. nda. S. 26.)と云ふもの是である。これは彼の設定したところの基準たるものである。從て個々の民族への適用に於いて、必ずしも嚴密にあてはめらるべきものでないと云はねばならぬ。それ故に、彼がその一般經濟史の最初の頁を飾る原始的經濟形態に於いては、かゝる基準の變容が行はれるのである。曰く、「若し自然民族の經濟制度を理解せんとするならば、それをそれだけ別に即ちその特色に於いてゞなく、自然的環境との關聯に於いて觀察しなければならない」と。(Ebenda. S. 20.)

このこと、即ち自然的環境との關係の重要視は、クノオの云ふ如く原始民族、殊に社會的生產の發達せざる自然民族に於いて云ひ得べきものである。何となれば云ふ迄もなく生產力の發展は、自然的環境の征服と社會的環境への依存とを同時に齎らすから。如何にも自然的環境、或は彼の云ふ地理的環境は、社會生活に於いて重要視さるべきものである。素、生產手段は人間の活動の結果たるのみならず、それは又自然の產物である。從て勞働要具が幼稚なる狀態にあつては、自然に對する社會の働きかけは僅少であり、地理的環境は人間の物質的生產を決定するものであつた。然し人間はその相互の社會關係の下に、この地理的環境から働きかけられると同時にこれに働きかけて、以て生產を發展せしめるのである。さて勞働要具は發達し從て生產力が發達すると共に、地理的環境の人間——社會的人間——に對する影響の性質は、生產力に依存し始める。後者は前者を決定する要素である。玆にあの謂ゆる地理的史觀(註)といふものの根柢は崩壞し始める譯けである。社會は變化する、生產力の發展に從て。生產力の發展に從て人間社會は發展する。

（註）ひとは、この史觀の主張者として、例へばモンテスキュウ、バックル、ラッツェル、近くはホラビン等等の名を想起すればよいのである。端的に云へば、これ等に於いては、人間活動の性質、社會の性質は地理的環境によつて決定せられると做すものである。

爰に於いて私の筆は本稿の始めに於ける問に對する答解に向けられることになる。それは次の如くである。

この生產力の發展といふ究極的推進力によつて、人間社會が發展するところに、歷史の本質は在ると考へられることである。そしてこの發展過程を研究するのが歷史學であると考へられることである。即ち人間と、自然及び他の人間との相互作用による生產の發展過程の研究、更に言葉を換えて云へば、人間が、一定の社會關係の下に於いて自然的環境に對し、働きかけると同時にそれ等から

働きかけられて、以て物質的生産を發展せしめるその過程の研究が、歴史學であると考へられるのである。乍然敢えて誤解を招かんことを恐れて一言して置きたい。歴史學とは何であるかに就いて云ふ右の定義付けに見らるゝ物質的生産の發展過程の研究は、素より物質的生産といふもののみを切り離してその發展を追ふといふのではない。それは對自然及び對人間の相互作用といふところからして明かなるが如く、謂ゆる上部構造の發展過程も勿論含めるのであり、この發展過程と物質的生産發展過程とを一の全體的關聯の下に、即ち兩者を統一的全體として研究するの意味であることを附言し置くであらう。

幾多の岐路に踏み入りながら、爰に於いて本稿の課題は一應果されたものとする。勿論この最後に掲げたる定義付けと關聯して、歴史學と經濟史との關係の如き、或は生産力の發展の如き、更には既に一言せる發展段階の如きは、論及する必要最も緊切なるものに屬する。乍然これ等はすべて他の機會に述ぶるところありたいと思ふ。又本稿に於いて對象とせるクノオの有する經濟史觀に就いては、遂に言及するを得なかつたのであるが、この史觀の特徴の一としての、經濟發展が直線的のそれであり、從て歴史に於ける飛躍を認めぬ點に就いては、特に批判を加へねばならないと考へる。そしてこのことの必要さは、この史觀が當今可成り多くの人々によつて意識的に又は無意識的に採り用ゐられてゐることからしても、特に大であると云はねばならない。然しこの問題は、「發展」に就いての究明に際して論ずることを至當とするが故に、「發展」の論究を他日に期した今に於いては、この謂ゆる經濟的唯物論の批判も亦、同じく他日に於いてその場所を見出すといふ徑を辿るのである。

慶應義塾創立七十五年記念　西洋經濟思想史展覽會目錄

I　重商主義の時代

II　重農學派

1　重農學派の先蹤

2　ケネーと其學徒

3　チュルゴオ其他の重農學派圏外者

III　古典學派及び之と密接なる關係を有する諸文獻

1　アダム・スミス及び其時代

2　マルサス及びリカードオ

3　ジェ・ベェ・セイ

4　リカードオの直接後繼者及びリカードオ、シィニィオアを中心とする時代

5　ジェ・エス・ミル及びケアンズ

6　米獨佛に於ける古典學派の發達

IV　歴史學派